

ロボット博士の創造への扉

病室の天井の設計

—固定観念を打ち破るゼロからの考え方—

第28回

もりまさひろ
森 政弘1 「これはこういうものだ」を打ち破る
ゼロからの考え方

創造性の最大の敵は、固定観念です。つまり「これはこういうものだ」という思い込みをなくすことです。私たちが住んでいる世の中では、この「これはこういうものだ」という通念ないしは常識があるおかげで、スムーズに会話が成立したり、意志疎通ができています。ですから、われわれはそれに慣れきってしまっているのです。ですから、それを打ち破るとするのは容易なことではありません。

しかし、その慣れきってしまって、普通には何の疑問も起こさない、まったく当たり前のことについても、根本に立ち返ってゼロから考えるところから、「これはおかしいんじゃないか?」と気が付くことができるようになります。ここから固定観念を打ち破るきっかけを得ることができるのです。

2 地下鉄に窓は必要か

本誌No.8の「創造への扉 第7回」で述べたことですが、今から27年も前に、私は、走っているときに「外が見えない地下鉄の車両になぜ窓があるのか」という問題を学生に出したことがありました。これも地下の暗闇の穴の中を走るといって、ゼロからの考察がきっかけでした。

最近では、エレベータの高級なものには後ろ側に外を見る窓があるものが増えてきましたが、一般には

エレベータには窓はありません。エレベータがそうならば、地下鉄だって窓なしでもいいのではないかと、私は前から考えていました。そこで、上記のような問題を、創造工学演習という授業で宿題に出したのでした。

解答のほとんどは、予想どおり目的論的なものでした。「窓がなければ駅に着いたことが分からないから」とか「窓の外の広告が見えないから」とか、ひどいものになると「窓ガラスの反射のおかげで、後ろにいるカワイコちゃんの顔が見られるから」など、「何かの目的のために」窓はある、という答でした。

しかし目的論を超えた答案もありました。それは、「地下鉄が出来る前に、すでに地上には電車というのが走っており、それは窓があるという形態で完成していた。その電車を地下に入れるときには、電車とはこういうものだという観念が固定してしまっていたので、誰も『地中に入れたら窓は不要なのではないか?』という疑問など抱かず、固定観念のまま、窓付の電車を地下に入れたからです」というのでした。

私もこれが正解だと思いますし、この学生が目的論に縛られていない観点を持ってくれたことは感動でした。

まさに、これこそ、電車とはこういうものだ—1車両に出入口が2ないし4ヶ所あり、その間には座席とガラスの窓がある—という固定観念の適例です。この固定観念を打ち破るところから、新しい車両というものが生まれるのです。